

スポーツビジネス界で仕事をしたいと願う若者が増えている。特にプロスポーツクラブなどの運営に興味が高まっている。大学では毎年のようにスポーツマネジメント学部やコース、大学院なども新設され、また20代から30代にかけて転職希望組も増えている。しかし、実情は非常に狭き門であり、新卒・公募採用などほとんど皆無なのである。

クラブに就職、転職した者が数年で辞めてしまうという話を聞いた。「その大半は中途入社組。今でも働いている多くはクラブが立ち上がった時からいる人間ばかり」。原因には、スポ

SPORTS MUST CHANGE

谷塚 哲



ーツビジネスやスポーツマネジメントに対する漠然とした華やかなイメージと現実の間にミスマッチが生じているからであろう。

プロスポーツクラブといえども日本の場合、多くは中小企業以下の小さな会社

行うことを考えれば、いかに大変な仕事であるかは容易に想像できるだろう。

こんな話も聞いたことがある。「現場では圧倒的に人が足りない。選手の契約や試合運営、スポンサー獲得、そして、地域貢献の活

新しい人材、ユニークな人材を求め、スポーツ界も新しい視点で人材を確保するべきである。雇用の創出は業界の責務でもあるし、それがスポーツ界を変えるきっかけとなるだろう。

大学とスポーツビジネス

育成 大学と連携を

である。従業員数人から十数人といった小規模の組織も多い。それだけに事務方にも新人を育てる余裕はなく、即戦力という人材が求められる。そして、その少ない人数でプロスポーツクラブの多岐にわたる業務を

動も全部1人でやっている。経験者であればすぐにも採用したい」。このようにスポーツ界の求人の方々は「経験者」に限られている。これがスポーツ業界は狭き門というイメージを作りだしている。しかし、

界もさらに連携を強化する必要があるだろう。大学の学部や専門書等、スポーツビジネス界に興味を持つきっかけはたくさんあるのに対して、出口(就職口)が圧倒的に少ない。大学は人気に便乗するばかりではな

く、スポーツビジネス界全体の底上げをしていく人材を育てる教育をしていかなければならないし、スポーツビジネス界も率先してそういう若者を採用する努力をしなければならぬ。

簡単にいえば「スポーツで飯を食っていける人材と環境」を大学、スポーツ業界が協力して作りあげていくことが今一番求められているのである。そして、スポーツに対する熱い情熱を持った若者こそが旧態依然とした今のスポーツ界を変えてくれると期待したい。

【REGISTA有責任事業組合代表】

次回1月16日掲載予定